
彼女の恋愛方法

幽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の恋愛方法

【Nコード】

N1446J

【作者名】

幽

【あらすじ】

16になった阿藤 銀はバイトに憧れてバイトをはじめますがバイト先は万屋でいろんな仕事をさせられるところで彼がする仕事とはある屋敷のお手伝いだった。しかし、屋敷の主人は同じクラスメートの雨宮 ルイだった。

16の誕生日

朝 起きると俺は16になっていた。今日5月13日というなんでもない日が俺の誕生日だ。

そして、法律的に「バイト」をしていい歳である。俺はバイトに憧れていた。(なんか、かっこいいから)もうすでにバイト先も決まっている。

友達に紹介してもらった万屋だ。なんでも屋ということだ。少し不安だが1時間1500円という素晴らしいバイトだ。

そんなことを考えて登校していると

「よう 銀」

と 後ろから親友の上島 晃介があいさつしてきた

銀 というのはおれの名前で フルネームは 阿藤 銀 だ。

「なんで 俺の16回目の誕生日の最初にお前なんだよ。俺は今日美少女と角でぶつかってラブコメが始まると天気予報のお姉さんがいったのに」

「なんだよ そのベタ!! さらに なんで 天気予報のお姉さん!!!??」

そんなことをいい学校についた。

「そんなに 美少女に会いたいならいるじゃねえか」

といい 晃介が指をさした方向には銀色の髪で肩までの長さで外に髪がはねていて眼は青色をした美少女だった。

「同じクラスの雨宮 ルイ あだ名は氷の女王だ。ちなみにお前の後ろの席だ。」

「確かに、美少女だ。だが、俺の好みは黒い髪のロングで純粋な子がいい。さらに、雨宮から私に話しかけるなオーラがでている。」

「せっかく席が近いんだから話ぐらいかけてみる。」

そっつい 晃介は笑いながら自分の席についていた。とてもあの笑顔がウザった。

「……………」

話かけてみるか

「やあ。 雨宮さんいい天気だね」

「……………そうね。」

はい 会話終了。なんだよいまの会話?!

そんなことがあり学校が終わり待ちに待ったバイトに行く時間だ。そのままバイト先に向かった。

2話だよ

着いたところは、なんでも屋（なんでも仕事をこなします）と書かれていた。

不安が増した……

「すみません。今日からバイトで入ったものですが。」

そついい 店の中に入ると、

「ああ、君かね今日から働くバイト君は??」

中から出てきたのは、30ぐらいのおっさんだった。

「はい、今日から働くことになった阿藤 銀です。」

「ああ、あいさつなんてどうでもいいちよつどよかった君は掃除や洗濯できるかね?」

いや あいさつはどうでもよくないだろ。人と人の最初のコミュニケーションを否定するなよ。

「はい。ひと通りできますが?」

なぜかという俺の家は母は他界していて父は職業柄、海外によく行くので帰ってくるのが3ヶ月に1度帰れたらいいほうなので家の家事は自分でしないといけない。

「それは、ちょうどいい、いまからここに書いてある住所に行つてご奉仕してきて！ここから歩いて15分ぐらいのところにある屋敷だよ。」

場所は俺の家からそう遠くない場所だ。

「それと、ご奉仕している間ここにこなくてそのまま屋敷に向かつていいよ。後バイト代はお客さんから直接もらって！！」

そついうとおっさんは奥の方に行った。奥から白い粉がという声が聞こえないことにしよう。

おっさんからもらつた地図をみて屋敷についた。最初この町に屋敷と呼ぶところはないだろうとおもっていたがそこは、ドラマなどで見る屋敷そのものだった。広さは俺の家の3倍から4倍はある敷地、外装はヨーロッパにある館みたいだ。

「すげえ マジで屋敷じゃん。この町にこんな屋敷があるとはねえ。つうかなんだよ仕事内容が執事つて俺そんな柄じゃねえよ。」

そんなことをいいドアに手を伸ばしノックして

「すみません。今日からここで働くことになったものですが。」

2話だよ(後書き)

はじめまして。 幽です。 初うpなんでそこんところゆるじゅー
!!

3話だよ

「今 開けます。」

そついいドアが開くと

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

中からでてきたのは雨宮だった。

え！ なんで雨宮！！ おい 現実逃避するぞそんでもう朝の天気予報のお姉さん絶対みねえええええでも お姉さん美人なんだよな。

「もしたして、ここ雨宮 の家か？」

コクツ と首をたてに振った

マジかよ！！！！なんだよクラスメートの家のご奉仕ってそんな聞いたことねえよ しかも今の仕草かわいいじゃん。

「阿藤君が今日から私の家で働くバイトのひと？」

なんで無表情なん！？普通クラスメートがご奉仕するって言ったら少しは反応するだろう。

「たぶん、そうだ。」

そういつと そう。 とつぶやいた。少し笑っていたような気がした。

「阿藤君それは、阿藤君が私の私専用愛玩メイドになるっていうこと?」

「いや 愛玩メイドは否定するけどここで働くのは本当らしい。」

なんだよ愛玩メイドってなんだよ。なんで少しうれしそうなんだよ。

3話だよ(後書き)

これからどう進めばいいかわからないのでみなさんの意見をそのまま反映したいとおもいますので
意見がある人はどんどんコメントして!!!

4話でどすえ

雨宮との会話？が終わり中に入ったら中も素晴らしく城といっても過言ではなかった。

「雨宮さんご両親は？」

「いないは、両親ともに私が幼い頃に亡くなったわ。」

爆弾ふんでもうた！！！当然のごとく重たい空気になったじゃん。だから俺みたいな手伝いを雇ったんか。

「そつよ。私家事ができないの。」

いま こころ読まれたの！！怖いよ読心術ってまじであるのかよ。

「阿藤君にしてもらいたいのは、掃除と洗濯と私の夕食の用意と靴をなめて。」

「最後の注文はおかしいだろ！！！！なに雨宮ってSだったの！？」

「違うわ。ただ阿藤君が私専用愛玩奴隷になったこと喜んでの愛情表現がこれだったの。」

「恥ずかしそうにそんなこというな！！しかもメイドから奴隷になつてるし！！雨宮さんってそんなキャラだったけ俺のイメージはクールで美少女な女の子だったのに。」

というが 雨宮の違う一面を見てうれしい自分がいた。

「学校でのキャラは他の人と交流を持ちたくないからよ。それと阿藤君に言いたいことがあるわ。私はあなたのことが好きです。」

「・・・え!!!なんて!!!!!!それマジなのか!?!?」

「ええ。本当よ。私は阿藤君のことが好きよ。だから今のは告白として受け取っていいわよ。だから返事を頂戴。」

突然のことで驚いたたぶんいまとてもまぬけな顔をしていると思う。たしか今雨宮は返事をくれていったよな雨宮はたしかに美少女だしかわいい俺と釣り合うのかと思ったぐらいだ。

「阿藤君返事はどうなの?」

「俺は雨宮さんがよければいいけど本当に俺でいいの?今日初めて会話したぐらいなのに」

「私は入学してすぐにあなたのことを好きになったわ。一目惚れではないけど阿藤君の人間性を見ていたら好きになっていたの初めて人を好きになっただわ。」

阿藤 銀16年目で初めて彼女ができました。

そこからのことはよく覚えていないが起きたら朝になっていた。

口がふさがれている呼吸ができない目を開けるとドアップで雨宮の顔があったというよりキスをされていたしかもディーブだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1446j/>

彼女の恋愛方法

2010年10月21日22時20分発行